

# 動作の起こり方を表わす語について

——「てしまう、ておく、てみる、た」の用法——

森 田 良 行

## I 問題の提起

谷崎潤一郎はその著「文章読本」で、日本語の時制表現について次のように述べている。(第2章「文章の上達法——文法に囚はれないこと」より引用)

われわれの国の言葉にもテンスの規則などがないことはありませんけれども、誰も正確には使っていませんし、一々そんなことを気にしては用が足りません。「した」と言へば過去、「する」と言へば現在、「しよう」と言へば未来であります、その時の都合でいろいろになる。一つの連続した動作を叙するにしても、「した」「する」「しよう」を同時に使ったり前後して使ったり、全く規則がないのにも等しい。だがそれでいて実際には何の不便もなく、現在のことか過去のことかはその場で自ら判別がつく。… (以下略)

確かに谷崎が指摘するように、日本語の時制表現は、西欧語文法の見地からすれば、規則性がないかのように見える。事実、日本語を学ぶ外国人にとってもこれは習得困難な問題であり、誤用例も多い。日本語は文末・句末を「～する」形にするか「～した」形にするかは、規則的な面と恣意的な面とがある。ある場合にはテンスが限定され、ある場合にはその選択が自由であるとすれば、いったいその規定は何によってなされているのか? テンス規定の法則性が知りたくなる。

ところで、動作の終了を表わすのに「～てしまう」という言い方がある。本来、辞である助動詞「た」とは別個の機能をになっているのであるが、

日本語に不慣れな外国人は、なぜ動作の終了を意味する「...てしまう」に「た」を付けなくてもよいのか理解に苦しむ。動作の起こり方を表わす語と時制表現との関係は日本語表現において特に重視されねばならぬ大きな問題である。そこで以下、動作の起こり方を表わす補助動詞と助動詞について順次解説しようと思う。

## II 動作の起こり方を表わす補助動詞\*

### 1. ~てしまう

「てしまう」は文脈によって種々の意味を帯びる。まず、動作性の動詞について動作の終了・完成を表わす。‘スッカリ...シ終ワル’終結の意味である。程度の副詞を冠して「ぜんぶ食べてしまう。/すっかり話してしまう。」のような使われ方が多い。この動作終了の意味あいは、多く有意志性動詞に付く場合に強調される。(瞬間動作動詞にも付くが、継続動作動詞の場合が多い。)

○爆発しないように起爆装置をはずしてしまう。

○出掛けるまえに食事をすましてしまう。

瞬間動作動詞、特に無意志性の動詞に付くと、完了の強調に重点が置かれ‘ヒドク...スル/完全ニ...スル/ホントニ...スル’の意味に転ずる。「あきれて～、忘れて～、あわてて～、(あつというまに)着いて～」など。

○世の中がすっかりおちついてしまったきょうこのごろでは...

(II 23)\*\*

○昭和20年5月の空襲で、この印刷所は焼けてしまった。(III 9)

「～てしまう」にはしばしば‘シテハナラナイコトヲスル。グアイノ悪

\* 本章でとり上げなかった補助動詞「ている、である、ていく、てくる」については、次の拙論を参照されたい。

「動作・状態を表わす言い方」(『講座日本語教育』第4分冊)

「行く・来る」の用法(『国語学』第75集)

\*\* 用例は主として早大語研日本語中級教科書から採った。( )内のI II IIIは第I部、第II部、第III部を表わし、算用数字はページを表わす。なお、作例は表示を欠く。

イ状態ニナル’。の意味が付加される。これは動作性動詞の他、状態動詞や受身・使役などを伴った形にも現われる。

○太田の奥さんがね、来ちゃったんですよ。(III 49)

○ちょっと小さすぎてしまった。

○おおかみに食われてしまうよ。

本来、好ましからざる事態の招来を表わす形式ゆえ、「(私は)試験がよくできてしまった。」などとは言えない。「た」を伴うことによって、すでに時間的におそすぎる、手遅れの意となる。他人の行為なら

○彼は秘密文書を人に見せてしまった。

のように‘困ることがすでに起こった’の意に、自己の行為なら

○私は人の手紙を見てしまった。

のように‘いけないことをすでにした’の意となる。もっとも、同じ1人称でも、

○すぐ見てしまいますから、お待ちください。

なら単なる動作の終了となり、けっきょく文脈によって左右されてくるわけである。

「～てしまう」は単に動作の行為過程の開始・終了・完成を概念として表わすのみで、表現時点における完了意識を表わさない。「書いてしまう」は‘全部書ク/書き終エル’の意に近く、「書いた」は完了した行為を表現の現時点で顧み確認する話し手の立場である。このことから

○絵具でかいてしまうまえに下書きをしておいたら。

は可能であるが、「かいたまえに…」とは言い得ない。また、

○さっき通り過ぎた。

○きのうガラスを割ってしまった。

動作の時を表わす副詞や名詞「さっき、きのう」などは「た」の表わすテンスと呼応し得るが、「さっき…てしまう。/きのう…てしまう。」とは言えない。ここに補助動詞と時の助動詞との機能差が認められるのである。

## 2. ～ておく

○予習をしてしまう。/ しておく。

「～てしまう」は「予習をする」という行為の終結・完成を示し、する行為に重点が置かれる。「～ておく」は事後を予想して前もって「する」のであり、したあとに残る結果に重点が置かれる。

「ておく」は有意志性の動作動詞に付き、意志による行為として示される。それゆえ自然物でも「花を咲かせておく。」は可能であるが、「花が咲いておく。」は成り立たない。意味は、自己のためか他者のためかで分かれる。

その1は、自己のために、事後を予想して事前に…を行なう〈準備〉を表わす。これは多く行なった結果の状態が事後まで続く。

○下見しておいたから安心だ。

○本や切手ならしまっておいたほうが値が上がるかもしれない。(III 2)

その2は、他者を前提とした行為で、ある状態にし、その状態をいつまでも続けさせる〈放任〉の意となる。これには使役(許容)を伴う言い方も成り立つ。

○思うようにやらせておく。

○言いたいやつには言わせておけ。

他者を前提としているが、やはり主体の意志の支配下にあることに変わりはない。この有意志性が、時として作為的にわざとそのように振舞い、また放任する意識ともなる。

○すこしほめておいた。

○相手をじらしておこう。

主体の意志性を内包するところから、多く他動詞、それも動作動詞が先行するが、まれに自動詞の先行することもある。

○今のうちにじゅうぶん眠っておこう。

「泳いで～、遊んで～、寝て～」など行為の蓄積が可能な場合である。状態動詞は原則として先行しないが、使役が付けば成立する。

○近くにいさせておく。

○うらやましがらせておく。

### 3. ～てみる

○字を書いておく。/書いてみる。

「書いておく」は書いた結果に目的があり、「書いてみる」は書く行為自体に目的がある。

○一回り散歩しようじゃないかと女を誘ってみた。(II 86)

‘タメシニ…スル’という実験的試みの意図を持ち、それゆえ有意志性の動作動詞に後接する。「咲く、におう、さめる」のような無意志性の動詞には続かない。ただし、条件形式を作る「～と/～たら」が後接する文型はこのかぎりではない。

○目がさめてみるといい天気だった。(例解国語辞典)

○使ってみると期待したほどの効果が出ない。(III 3)

○朝になってみたら熱はさがっていた。

○咲いてみるとそれほどきれいな花でもない。

人間の行為・動作の場合は無意識裏に行なった結果の状況を、自然現象の場合はその事態が成立した時点における状況を表わす。

### 4. ～てみせる

「～てみる」が自己のために試みる行為であるのに対し、他者のために試みる行為は「～てみせる」で表わす。有意志性の動作動詞に付く。この形式は本来

○正しく発音してみせた。

のように、他者のために行為して提示することを表わすが、この提示意識が強まると、

○しいて笑ってみせた。

○上品ぶってみせる。

他者の目を意識してわざと誇大に行為する意味合いが強まる。

使役「せる/させる」を介して付く場合には、行為者が他者に転ずるば

かりでなく、他者(有情物)を対象にすえて、相手に自発的に行為させるのだという強い意志を表わす。

○きっと本当のことを言わせてみせる。

○鳴かぬなら鳴かせてみせようホトトギス。

それがことがらを対象にとって、自己の行為に対する強い意志・覚悟・決意をも表わすようになる。

○きっとこの仕事を成功させてみせる!

さらに、使役が落ちてしまう形式も生ずる。

○きっとものにしてみせるぞ。

### III 形容詞表現・否定表現とテンス

形容詞、打消「ない、ぬ」、体言+断定はテンスを表わさない。これらの語は本来時間的観念を持たないから、テンスを示すためには「ある」を介して「寒くあった→寒かった/静かだった/雨だった/行かなかった」と動詞の力を借りねばならぬ。しかし、たといかり活用+タの過去形をとったとしても、機能的にはク活用の終止形と重なる。「きのうは行ったか?」の質問に対し、肯定形は必ず「うん、行った。」と過去形をとるが、否定形は「いや、行かなかった。/いや、行かない。」の両様が成り立ち得るのも、このことを端的に示している。

○ぼく、やんないよ。/やんなかったよ。

「やんないよ」は過去にも未来にも使える。

○お金がない/なかったので買いに行きませんでした。

○お金が手にはいったので買いに行きました。

文末が「た」のテンスゆえ「手にはいるので」は成立しない。(ただし、動作動詞に限る。状態動詞は「金があるので/あったので」両様可能。)

○「やった、やらぬ」の言い争い。

「やらなかった」と言わない。動詞だと、動作動詞の場合「た」が付けば過去にも完了にもなり得るが、形容詞や打消形は「た」が付くと過去に

限定されてしまう。「腹がすいたよ!」と完了で表わすところも、形容詞なら「腹がひもじいよ!」と終止形で表わさねばならぬ\*。動作の完了も現在の判断なのである。これは体言+断定の場合も同様である。

○いつになく感じがなまぬるく来た。ほおの色も少し青い。(II 87)

○たとえば大震災の災害にあっても、また来た、しかたがないというあきらめがあるんです。(II 63)

○国語や数学や英語の学科に何点をとったか、それらが5段階評価の5であるか3であるか... (II 37)

#### IV 動詞の表わすテンス

動詞の表わすテンスは動作動詞と状態動詞とで異なる。「ある、いる、見える、買える」などの状態動詞は言い切りの形(終止形)で用いるときは

○沖の暗いのに白帆が見える。

○あしたはきっと富士山が見えるぞ!

のように現在および未来を表わす。その点、「行く、食う、降る、死ぬ」等の動作動詞は、

○今晚雨が降る。

のように言い切り形は未来のみで、原則として現在を表わさない。現在表現は「～ている/～である」を付加して継続・進行や結果の現存として表現しなければならない。もっとも、現在・未来と分けても、その表わす動作・作用・行為・状態などが現実のことがらとして確かなものと認められるか、まだ不確かな段階にあるかの違いでしかなく、ともに現時点において話し手によって認識されたことがらである点では、未来もまた現在の一部と言わなければならない。

あしたはあしたの風が吹く。/打てば響く。/江戸のかたきを長崎で討つ。/生あるものは必ず滅する。/無理が通れば道理ひっこむ。/災い転

\* 動詞と形容詞との相違については拙論「動作・状態を表わす言い方」(「講座日本語教育」第4分冊)を参照されたい。

じて福となる。

のようなことわざ・慣用句の類いでは、動詞の言い切り形が現在とか未来とかに限定されず、一般的な真理として超時的であるのも、日本語動詞の表わすテンスが現実の時間の延長線上での現在・未来を区切ったものではなく、単に表現時点における現在の認識を表わすにすぎないことを示している。このことは

○彼はいつもよく働く。

○夜は星が見える。

などの例を見れば明瞭であろう。本来、動詞の言い切り形ははなはだ概念的で具体性に乏しい。「歩く」はそれのみでは概念として歩く行為を表わし、現実の場に使うときには「歩いている/～ていく/～てくる/～てしまう」と補助動詞の助けを借りなければならない。

○働くとは仕事をすることだ。

や辞書の見出し語の形など、完全に抽象的な意味となり、テンスは消え去っている。

動詞の言い切り形が現時点における話し手の概念的認識であることから、動作の瞬間的認識として現在表現を代行することがある。

○雨が降ります、雨が降る。遊びに行きたし傘はなし…

○坂は照る照る、鈴鹿は曇る。

口頭語では「あ、汽車が来る!/あ、帽子が飛ぶ!/木の葉が落ちる。」のような現在表現もあるし、戯曲のト書き「ベルが鳴る。太郎立ち上がる。」のような言い方もある。いわゆる歴史的現在は、状態動詞やテイル形の現在表現に合わせて、この種の概念的現在表現を組み合わせたものである。

次に、過去表現は動詞に「た」を付けて表わすと言われているが、これも現実の過去ではない。表現時点における過去の認識(回想とか確認など)を示すにすぎない。たしかに状態動詞は「た」を伴って「昔ここに池があった。」のように過去を表わし、動作動詞は「きのう帰った。/いま帰った。」のように過去や完了を表わす。しかし、「そら、ここにいた。/あ、こ



こにあった。/あ、おとうさんが帰った。」など決して過去の事実や動作の完了を述べているのではない。その事実を現在の立場で発見し確認しているにすぎないのである。

日本語の動詞は、現在に結果が残っている事実も残っていない事実も、ともに「～た」の形で表わす。

○今日まで21年間、凸版印刷の受付係を職場として過ごしてまいりました。(II 23)

○来た当座は食べ物が変わるためか少しやせましたが、… (I 23)

‘過去の事実だから’、‘現在も残存する事実だから’、‘いま完了した事実だから’などを認識区別して現実の時間との対応からテンスを規定しない。文脈中での表現時点において、その事実を確立した事実ととるか否かの主観的判断にしたがって「た」の有無が決定される。それゆえ、1つの文中に2つ以上の動作・状態が並立するときは、その認識いかんによっては両者とも「～た」形式をとり得る。

○貧乏なタル洗いの人夫だった正左衛門は自家用車を二、三台も持つような富豪になったのである。(I 54)

○三四郎は突然として、初めに池のまわりで美禰子に会った暑い昔を思い出した。(II 92)

もちろん時間的先後関係からすれば、正常な文にあっては、文脈内の初めに位置するほうが時間的により以前の事態である。その事態が確立した場合という認識のもとに次のことがらを述べるのであるから。

○あとにも先にも大目玉を食ったのは、中学2年のとき、…アイスクレーターのくつを買ってきたときである。(II 56)

のような倒置文では先後関係は逆になる。

このように、前件の動作・状態が確立したと認定したとき、その状態や場の中で後件の動作が成立すると考えるのであるから、現実には未来のことや架空のことであっても、認定いかんでは「～た」表現が成立する。

○あすなさ早く来た人が掃除すればいい。

○今度の試験でいちばんいい成績をとった人にごほうびを上げよう。

○雨の降る日にかさをささないで往来を歩きたいと思っただとしても、なかなかそうはさせてくれない。(III 42)

要するに「～た」によって表わされる事態は、現実の過去ではない。話し手が文脈内の時点において観念として回想する気持ちや確認する気持ちなのである。

○こんどの日曜日鈴木先生のところへみんなで行くことにしたんだけど、きみもいっしょに行かない?(I 12)

○あした試験あったっけ?

のような確定や確認の場合でも「た」が使える。過去とか完了とか、現在とかいう判断も、けっきょくは動作・状態に対する主体の働きかけであり、現実の時間を意味しない。日本語では過去・現在・未来とテンスの3分法をとるべきではなく、表現時点における話し手の認識態度のあり方から、完了確立したものとする確認的認識と、未了未然のものとする現在の認識とに2分すべきなのである\*。いわゆる時の助動詞は主体の心的態度に結びついた語であり、命題の認識のしかたの区別(命題に対する主体の心理的距離)がテンスとして表われるととるべきである。命題の成立自体の時間が問題なのではない。

## V 終止形「た」の意味と用法

終止形の中でも特に言い切り形に限定して考える。言い切り形「た」は文脈によって意味に差が出てくる。

### 1. 過去・経験

動作・作用が過去に行なわれたとの認識を表わす。

○彼は大正4年にこの発明の特許をとった。(I 54)

これが「私は…」と話し手自身についての叙述になれば、経験の意味

---

\* この2分法を、用語は違いますが、金田一春彦氏は「以前、非以前」、三上章氏は「完了、未了」と呼んでいる。

が加わってくる。経験も過去のうちである。経験を表わすのは、話材(動作主)が言語主体の場合である。また、先行動詞は、意志的な動作性の継続動詞の場合に経験となりやすい。

○私は高校時代、一夏に3度も富士山に登った。

これを可能動詞「登れた」に置きかえると「登レタモノダツタナア…」という回想に転じてしまう。

瞬間動詞では他動詞の場合経験となり得る。

○そうやって(私ハ)アイディアを見つけた。(I 56)

「見つけた」と他動詞が立つからこそ「私は…見つけた」と経験になる。自動詞「見つけた」だと「アイディアが…見つけた」となって、主語が1人称でなくなり、意志的動詞でなくなるから、経験とはならない。完了となる。

## 2. 完了

動作・作用が完了または実現している状態に対する現時点での認識を表わす。命題の時間には関係なく、現在のことに過去のことにも言える。

○菊治は太田夫人とまともに向き合っていることに気がついた。(III 51)

○ふたりはまた無言で五六間来た。三四郎は突然口を開いた。(II 89)

○彼が谷川岳へ登ってもう1週間もたつ。/ たつた。

最後の例は「たつ」だと経過していることを、「たつた」だと経過したことに対する現時点での確認を示す。それは1週間という時の長さをすでに経過しおえたという完了意識でもある。だいたい完了とは動作性に伴うものであり、打消形やテイル形・受身などの場合は状態性を帯びるため完了意識は生まれにくい。5.の回想意識となる。

## 3. 確かめ

確述・確定・強意など種々の用語で示される確かめ意識は「～た」の中心意義と考えられる。過去も完了も広い意味での確かめである。確かめは、動作・状態・ことがらがまちがいなく成立したことを認知し報告するもので、多分に心理的な言表である。

○きょうは足立幹彦さんから「つゆどきの暮らし」についてお話を伺う  
ことにいたします。(I 37)

○ただいまのお話は東京医科大学教授の足立幹彦さんでした。(I 41)

前者はスピーチのまえ、後者はスピーチのあとのアナウンサーの言葉である。だから前者は未来形、後者は過去形を用いたわけではない。その証拠に、両者のテンスを入れ替えても共に正しい日本語である。しかし、客観的事実はほとんど違わないとしても、表現意識はかなり違う。

○どうもいろいろありがとうございます。ございました。/ ございます。(I 3)

○うん。じゃ頼んだよ。/ 頼むよ。(I 17)

「～する」形は概念的であり、「～た」形式は事態の成立を確認する気持ちが働く、より具体的表現となる。

○彼は以前からここにいた。/ いる。

「～いた」は客観的事実を経験として報告し、間接的で確かめの念が強い。「～いる」は主観的な知覚として表出・主張するのみで、直接的で念おし意識がない。「～た」表現の地の文に「～する」形ははいり込むいわゆる歴史的現在、この種の言い切り形である。「～た/～する」の対立は心理的要素によっている。

○行ったほうがいい。/ 行くほうがいい。

あいさつ言葉「おはようございます。」は一部の方言を除いて「～ました」形を使わないが、

○ごちそうさまでした。/ ～です。

○おめでとうございました。/ ～ます。

は両形式可能で、共に未来にも過去にも使える。

期待していた事態の実現に対しても、それがまちがいに成立したのだという確認意識が働き、「～た」表現をとらせる。

○電車が来ました。/ ～来ます。

○時間になりました。/ ～なります。

同じ事実でありながら、とらえ方に心理的な差(期待の有無)があるわけ

である。期待の実現の他にも、予想的中「やっぱり彼だったよ。」、発見「ああ、わかった。」(I 13)、「何だ、夢だったか!」、さらに詠嘆や驚愕「まあ、あきれた!」「こりゃ驚いた!」と確かめの「~た」は心理的表現に多用される。

#### 4. 命令

話し手の心理内容がきわめて主観的に高められた表現として、命令の「~た」がある。これは終止形しかない用法で\*、動作動詞+タにのみ見られる。

○おい隆ちゃん、降りた、降りた、降りなきゃ登って行って引きずり降ろすよ。(野上弥生子「哀しき少年」)

<sup>すも</sup>相撲の「残った、残った」、バナナのたたき売り「さあ、買った、買った」、その他「どいた、どいた」「並んだ、並んだ」「さあ、歩いた!」など。

#### 5. 回想

1~4の諸形式は主として「た」が動作性を受ける場合についての用法であったが、次に状態性を受ける場合について考察を進める。

「た」が状態性を受けると回想意識となる。そのような状態が過去にあったということを現時点で確認することは回想することに通ずる。状態性を表わすものに、存在詞「ある、いる」やその他の状態動詞がある。

○高等学校から大学にかけて、私に女友だちから手紙が来ることがあった。(II 57)

○あちらこちらと捜し歩いた末、ようやくその焼け跡を見つけ出すことができた。(III 9)

「できた」は可能の「できる」ゆえ状態性を帯び、回想意識となる。同じ「できる」でも

○ここで日本人の友だちも何人かできました。(I 5)

は「生ずる」意の動作性ゆえ、回想意識は生まれない。完了である。ただし、動作動詞でも打消やテイル形・受身の場合は状態性を帯び、回想意識

\* 金田一春彦氏は、これを「不変化助動詞」と名づけている。

となる。

○あなたはうちわをかざして高いところに立っていた。(II 92)

○受付係では私が最年長だったものですから、いつも矢面に立たされま  
した。(II 24)

形容詞や体言＋断定の場合も同様である。

○何か名人かたぎというような感じを与える職工さんであった。(III 9)

## 6. 想 起

「た」のあとに疑問や確認・念押し等の終助詞や間投助詞が伴うと、回想意識がより心理的・主観的となり、用法も固定化する(終止形のみ)。過去の経験なら回想となるが、経験的事実ではなく、承知ずみの知識や決定ずみの事態、既定の事実等に対しては想起となる。

○火星に衛星あったかしら?

○お宅に電話あった?

○あした試験あったっけ?

○火曜日はだめです。授業がありました。

「授業があります」では単なる主張となる。

○「これが大隈さんの銅像です。」「早稲田大学を建てたかたですね。」

「～かたですね」は主張の確認形式。「～かたでしたね」なら想起による確かめ意識となる。

○「私は燭台まであげたのに、なぜあなたは持っていらっしゃらなかったのか」と言うんでしたね。(II 4)

想起形式は、逆に見れば承知ずみの知識であることを暗示する。対人関係に対して用いれば、相手を承知していますよとの心づかいが、相手に対する敬意ともなる。

○何年ぶりかでお見かけしてごあいさつをすると、たいていは“どちら  
でしたか”とげげんな顔をなさいます。(II 27)

「どなたですか?」では失礼になろう。

## VI 連体形「た」の意味と用法

動詞＋連体形「た」は連体法に限られる(形式名詞の付いて体言化する用法も含めて。)その場合「た」の表わす意味は、文脈や先行動詞の種類により2種に分れる。1つは動詞の動作性そのまま働く完了(これは終止形と同じ機能)、1つは動作性が状態性に置き替わる属性所有(これは連体法特有の機能)である。属性所有とは、動作・作用やその結果が存続して1つの状態としてそのものの属性となっている場合をいう。状態性を表わす点では「ている/である」と同じである。だいたい動詞が状態を表わす場合といえば、1. 本来状態を表わす状態動詞 2. 動詞＋ている/である 3. 動詞＋「た」の属性所有(折れたくぎ、削った鉛筆、など)の3種である。

○またさらに違った面から見れば、どうとでも弁解のつくことばになっています。(II 12)

のように「違う面/違っている面/違った面」と3様可能な動詞もある。さて、

○内山峽に沿った静かな道。(II 33)

「沿う」のように属性や状態の意味を帯びる動詞は、「沿う道」で状態性を表わし得る。それが「沿った道/沿っている道」と、ほぼ等価な表現を共存させる。

帯びた～、異なった～、適した～、…を持った～  
など、いずれも3様可能な動詞である。一方、

○ホップのきいたビールよりもずっとうまいね。(II 74)

「ている」は可能だが、「きく～」とは言えない。

似た～、苦みばした～、尖った～、さらさらした～、ぼかげた～、  
しゃれた～、しっかりした～、砕けた～、ありふれた～、ふとった～、  
整った～、澄んだ～、冷えた～、曲がった～、焼けた～、変わった～  
いずれも「た/ている」のみ可能な動詞である。これらは本来状態の意味を帯びる動詞か、または自動詞の動作動詞のうち属性や状態に関する意味

(状態の変化、比較、関係など)を有する動詞である。ただし「そびえる」のように「た～」のみ不可能な特殊動詞もある。

なお\*、「～た/～する」のみ可能で「ている～」を持たぬものは  
そういった～、といった～…、に因んだ～

のような慣用化した言い回しである。「た～」しか成り立たないものは  
主だった～、表だった～、こうした～、大それた～、ちょっとした～、  
ふとした～、ほのぼのとした～、れっきとした～

のような1語化し、無活用化した連体詞的な語(または句)である。

自動詞に「ている」が付いた場合、状態の意を帯びる動詞\*\*なら「似ている」と状態性を、瞬間動作動詞なら「窓があいている」と結果の現存という、これまた状態性を表わすが、継続動作動詞の場合は「雨が降っている」のように継続進行の動作性となってしまう。それゆえ「た」の属性所有と置きかえのできるのは「似ている人/似た人」「あいている窓/あいた窓」の兩種で、「降っている雨/降った雨」は意味上対応しない。

ところで、瞬間動詞は対応するといっても、「決まった顔ぶれ」の属性所有も「さっき決まった顔ぶれ」のように動作の時を表わす副詞が付くと、完了となり、「ている」と対応しない。

○いま鳴いたからすがもう笑った。

○久しぶりに雨のあがった日曜日 (I 18)

文脈上「ている」との置きかえを許さぬ完了である。

○咲いた花なら散るのは覚悟。

動作の完了ととるか、その作用や結果が存続して属性と見なし得るか、その境は微妙である。他動詞も受身を伴えば属性所有となる。

○仙台付近は、とくにそれ以北は、最も取り残された土地になっていた。

(III 57)

\* 以下の叙述は宮島達夫氏の調査「現代雑誌九十種の用語用字」(国研)を参照。(状態の表現, p. 167)

\*\* 「ある, いる, 泳げる」のような状態動詞は「ている」が付かない。意味上重複するから、その必要がないのであろう。



同じ現実の状態でも、「～た」形式で表わすと、きわめて概念的な状態性になってしまう。その点、進行や継続に近い「～ている」形式の具体的で現実的な生きた状態性とは違う。

○自動車に乗った人 / 乗っている人

「乗った人」を属性所有ととると、かつて乗ったことのある経験者か、さもなければ静止した画中の人物を考える。「乗っている人」は現実は今車中にある動的な人物を想像する。慣用化した言葉「生きた心地もない。/ 生きた言葉。/ チョコレートの掛かったお菓子。」など、いずれも抽象的・概念的で無テンスである。

他動詞の場合は「てある」に対応する。「思いのたけを込めた手紙。/ 絵にかいた餅」

○屏風にかいた絵 / かいてある絵

属性所有の状態性も、動作主が主語として明示されると、

○横山大観が屏風にかいた絵

のように完了の動作性が表立ち、テンスが強まり、結果の存在となってしまう。「てある」へ置きかえると意味が変わってしまう。他動詞の場合、多くは意志的な動詞に「た」が付いて属性・状態性を帯びさせる。

○長石を入れた本格的なうわぐすり (III 26)

○それは江州商人を出した近江のことだからとも言えよう。(III 55)

あとの例「出した」は意志的でないため「出してある」への置きかえはできない。この用法はしばしば超時的で一般的事実や真理ともなる。

○人から聞いた知識は不正確である。(III 13)

○つゆどきといっても、ときどき思い出したように晴れることがあります。(I 39)

また、慣用化された比喩も作る。「捨てたものでもない。/ 聞いたふうなことを言う。」

## VII 同一文中における2つの動作作用

### 1. ~するのを~した / ~するのが~だった

準体助詞「の」や形式名詞「こと」によってくくられる先行句のテンスは、文全体を表わす展開句のテンスに規制されない。

動詞の連体形を「~するの / ~すること」となまで用いると、概念的で無テンスとなる。

○ことしはつゆの来るのが少し早かった。(I 37)

○...という期待が心の片すみから消えることがありませんでした。

(II 29)

「つゆの来るの」は「梅雨の入り」「消えること」は「期待の点滅」という体言的概念に近く、作用の具体的な実現をテンスを伴って動詞的に表現していない。

### 2. ~したのを~した

### 3. ~しているのを~した

○日本へ来たことを後悔する。 / した。

2. の形式は事態が成立・実現したという事実を、完了後の結果や状態に主眼を置いてとらえたもの。3. の形式は現在の事実として認識する。もし「していたのを」なら過去の事実として確認し回想する気持ち。

### 4. ~するとき~する

以下7. までは対等の2つの行為・作用を並行させる言い方で、「とき / あいだ」が用いられる。展開句の文末形式は過去・未来どちらも可能であるが、文末のテンスは先行句のテンスを規制しない。

4. の「~するとき」形式は連体形の持つ概念的意味合いが濃い。「するときは」「する場合」と置きかえのきく、超時的事実や真理、仮定的事態のことが多い。

○えくぼは笑うときできる。

○日本へ来るときは前もって知らせてください。

未来の行為や日常の習慣化した行為には「場合」との入れ替えはきかない。

○新聞はあした / 毎日会社へ行くとき買う。

#### 5. ～するとき～した

文末形が過去・完了をとるため、すでに成立した現実の具体的事態を表わし、先行動詞の種類によって「とき」の意味もきまる。動作動詞の場合、事態の成立には、成立に先立つ前段階〈直前〉と、成立するまでの過程〈途中〉とが内在する。瞬間動作動詞はふつう〈直前〉または成立の〈同時性〉を、

○芭蕉は死ぬとき辞世の句を詠んだ。

○雷が鳴るときピカッと光った。

継続動作動詞は〈最中〉か〈途中〉を表わすことが多い。

○清盛は死ぬときさんざん苦しんで死んだ。

並立する動作・行為が瞬間性のものか継続性のものかで2種に分かれる。

「来る、行く、帰る」のような移動動作動詞は

○私は旅行に行くとき、食糧を準備した。

○その昔、神父ヨゼフ・ロゲンドルフが日本に来るとき、初めて日本字の野立て広告を見て、さっそく字引きを引いた。(II 73)

○彼はうちへ来るとき車に乗ってきた。

〈直前〉〈途中〉〈同時性〉の3種がある。状態動詞「いる、できる」や、形容詞・形容動詞「若いとき / 元気なとき」は、その状態の存続している〈期間中〉を表わし、未来のことにも過去の事実にも使える。

#### 6. ～したとき～した

この形式は「～したあいだ」と「あいだ」が使えない。「た」の連体形が属性所有を表わすところから、

○いなかへ帰ったとき旧友に会った。

「いなかへ帰った」は「とき」の属性として状態化する。その「とき」はどんなときか? いなかへ帰ったときだ。——つまり事態の成立を動作過程

として分析しない。全行程を一事実としてとらえる。場面は目的地か途中か判然としないことになる。

○日本へ行ったとき買った本です。/ 沖縄に寄った。/ 富士山を見た。  
もちろん動作性として「た」の完了が強調された言い方も成り立つ。〈完了時〉または〈完了後〉を表わす。

○足が棒のようになって、うちへ帰ったときはクタクタ。(II 15)

○あの電報が来たときはびっくりしたよ。

状態動詞も、状態の〈成立時〉を表わす。

○受付にというお話がありましたときは、しりごみしたのですが、(II 23)

さて、5. の「～するとき」6. の「～したとき」はしばしば用法が重なる。2つの動詞の時間関係は文末動詞の性質によって決定する。

○彼はうちへ<sup>来る</sup><sub>来た</sub>とき、花を持って来た。

「持ってくる」のように「うちへ来る」と平行しうる行為〈平行性の行為〉は、行為の同時性を表わし、5. 6. 両形式に差は生じない。

○彼はうちへ<sup>来る</sup><sub>来た</sub>とき、恋人に会った。

「会う」のように「うちへ来る」と平行しえない行為は〈順序性の行為〉となり、5. 「～するとき」形式では時間的前後関係を生み出す。両形式は場面の違いを生じ、「来るとき」は〈途中〉で、「来たとき」は〈同時性〉ゆえ「うちで」恋人に会ったのである。

○ふろに<sup>はいる</sup><sub>はいった</sub>とき、足を洗った。

これも〈順序性の行為〉であり、前後関係を生む。「はいるとき」は〈直前〉に、「はいったとき」は〈同時性〉の行為である。

7. ～しているとき～した

「とき/あいだ/うち」いずれも可能な形式である。「していた～」だと「うち」が使えない。7. の形式は、継続動作動詞の場合は継続・進行中という〈最中〉を表わす。

○えくぼは笑っているときできる。

○2人の令嬢が茶室へはいる前にたびをはきかえているとき、菊治も来た。(III 46)

瞬間動作動詞なら結果の現存中という〈期間中〉を表わす。

○窓があいているときは、どろぼうがはいりやすい。

状態動詞には「ている」形が付かない。

8. ~するまえに~する

9. ~したあとで~する

先行動詞のテンスは「まえ/あと」の語で決まる。事実の過去・未来とは関係ない。「~したまえ/~するあと」とは言えない。

○国の飛行場を出たまえに、友だちが大勢見送りに来た。(留学生の誤用)

5. の「~するとき」形式を用いるべきであろう。

10. ~する時間より~する時間のほうが~だ

11. ~した時間より~した時間のほうが~だ

○彼は勉強する時間より寝る時間のほうがみじかい。

「する——する/する——した/した——する/した——した」の組み合わせの他、「ている」の加わった組み合わせも考えられる。「~する時間」は概念的で、日常の習慣化した一般的事実として、「~した時間」は具体的で、ある特定の事態について述べている。

○教室で勉強する時間より友だちと話し合う時間のほうが楽しい。

○彼はアメリカにいた期間より日本にいた期間のほうが長かった。

「する/した」の組み合わせも成り立つ。(多くは状態動詞が「ている」形式の場合)

○家にいる時間より会社にいた時間の方が長かっただけに (II 29)

○(電車で)立っていた時間より坐っている時間のほうが長い。

12. ~してから~する

13. ~してから~した

以下 15. までは、ある動作・作用にひき続き次の動作・作用が生ずる場

合である。いずれも先行句のテンスは展開句のテンス(文末のテンス)に規制される。展開句が過去なら先行句「～してから」も過去となる。

○菊治は茶を飲んでから茶わんをちょっとながめた。

「ながめる」と有意志性動詞の場合は動作の順序性であるが、

○東京へ来てからもう三年半が過ぎました。(II 43)

「過ぎる」のような無意志性動詞のときは「...シテ以来...ダ」となることが多い。

14. ～して～する

15. ～して～した

「～して」展開は、陳述のしめくりをせず展開句へと流れる。表わす意味は前形式「～してから」に近い。

○菊治はあいまいに言って、茶わんを下に置いた。(III 53)

前の動作がはっきり終わってから次の動作に移る場合が多いが、さらに

○一直線に生がきの間を横切って、大通りへ出た。(II 86)

○着物のはなやかな色彩が目にあふれて、はじめ1人々々の見分けはつかなかつたのだ。(II 51)

のように、前の動作が成立することによって次の結果が生じた、という因果関係をもってくる。次の例は19.「～ながら」の〈同時進行〉に近い。

○飛行機が煙を吐いて/吐きながら墜落した。

16. ～し～する

17. ～し～した

いわゆる連用形中止法である。先の「～して」展開は、前の動作が一段落(完了)してから次の動作に移るという行為の時間的順序性と連続性とを有していたが、中止法「～し」展開は、心理的に無関係な動作・作用を無秩序に並列するという意識である。各動作・作用は話し手の観念としては現在である。

○そうだな。お茶を飲み、ジュースを飲み、それから牛乳も飲もうか。

○朝は食事の前30分、かならず書齋にかぎをかけ、ことりと音がし

なかった。(II 59)

もちろん 15.「～して」展開と同様に因果関係を表わす例も見られる。

○将来への励ましにするのも有意義かと思ひ、次のような会を開くことにいたしました。(II 43)

18. ～しながら～する

19. ～しながら～した

動作動詞に「ながら」が付くと〈同時進行〉か〈逆接〉となる。その差は先行動詞と後続句の意味(文脈)で決まってくる。「～していながら」形式はすべて逆接)。〈同時進行〉は同時に起こる継時的な作用・行為を有情的に関係づける発想で、動作主が無情物の場合は擬人化する。

○たくさんの原子力が同時に勢いづけられまして、お互いに衝突しながら反応をどんどん進行していく。(III 22)

「歩きながら/食べ～/泣き～/寝～/...し～」と有意志性の継続動作動詞に続くのがふつうで、「落ちる/鳴る/...になる」等の無意志性動詞に接すれば逆接となる。同時進行「ながら」は瞬間動作動詞には続かないが、「手をたたきながら歩く。」のように〈反復行為〉としてなら成り立つ。「ながら」を受ける述語動詞は、「ながら」に先立つ動作と〈平行性の行為〉をなすものに限られ、〈順序性の行為〉は不可能である。それゆえ多く継続動作動詞が述語となる。しかも、同一主体の行為に限られ、前後で主体の入れ替え(主語の転換)がきかない。7.「～ているとき」では

○橋を渡っているとき考えた。/救急車を見かけた。/地震が起こった。いずれも可能であるが、「ながら」の場合は同一主体の平行性行為「考えた」しか成立しない。なお 12.~19.の各形式の違いは、日本語教育の初期の段階でしっかりおさえておく必要がある。

- ラジオを聞き、勉強する。　　〈並列〉
- ラジオを開いて勉強する。　　〈因果関係〉
- ラジオを聞いてから勉強する。〈順序性〉
- ラジオを聞きながら勉強する。〈同時進行〉